

## 庄野英二・庄野潤三書簡にみる作家兄弟の素顔

彭 佳 紅

### はじめに

今年（二〇一六）は、帝塚山学院一〇〇周年・学院大学五十周年の節目の年である。

十月九日、大阪市住吉区民センター小ホールで、帝塚山派文学学会が主催、大阪市住吉区役所が共催、学校法人帝塚山学院が後援という地域に根差したコラボで、学院一〇〇周年記念文化講演が行われた。第一部は、ラバー・ダックで知られている芝川能一社長が、「芝川家と教育、広岡浅子と竹鶴政孝・リタ」について、貴重な社内資料に基づいて、当時の企業家はいかに惜しみなく私財を投じて大阪の都市文化と教育に多大な貢献をしたかを語られた。第二部は、日本大学の専任講師上坪祐介氏による「庄野潤三の文学と帝塚山」の講演である。

大正初期に、「帝塚山」という新興住宅地に帝塚山学院が産み出され、昭和には、帝塚山の地から数多くの一

流の作家、詩人、教育者が輩出された。この高き志と良き品格を帝塚山のDNAとして継承していくのが、帝塚山という文化を創出してくださった先達への礼儀ではないだろうか、二方の講演を拝聴して感じたことである。今回の発表では、庄野潤三文庫にある庄野英二（一九一五―一九九三）が六つ年下の弟・潤三（一九二一―二〇〇九）に送った書簡と、庄野英二文庫にある庄野潤三から兄・英二に送った書簡を、著作権者の協力を得て、初公開する。

これらの書簡は今後庄野英二文学の研究には勿論のこと、庄野潤三文庫の研究においても重要な資料になると思われる。

両氏の書簡を公開するにあつて、書簡の原状を再現するために、そして作家の言葉のリズムや呼吸を感じさせるために、漢字や新旧仮名遣いの不統一、句読点（空きマス）などに対して原文のままにして直していない。但し、読者が内容を理解しやすくするために、書簡に出てきた人名などに対してはすこし説明を加えている。

今回公開した十二通の書簡には、封書と葉書との二種類ある。書簡の年代は、一九六六年四月から一九八一年四月までのものである。内容については、便宜上「日常生活の報告」「作家同士の交流」「趣味、関心」の三分類している。

本論の表記は、下記の通りになっている。

◆は、「庄野潤三文庫」の整理番号と庄野英二↓庄野潤三への書簡。

★は、庄野潤三↓庄野英二への書簡。

\*は、文中にある括弧内\*の付いた箇所、筆者が加えた注釈である。

## I 日常生活の報告

◆00220179-07 庄野英二↓庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和四一―一九六六年四月六日）

【原文】

おはがきありがとうございます

授賞式の日はありがとうございます。夜おそくて子供達にバナナを贈れなかったのが痛恨

あの翌日 白馬に一泊、大糸線で富山へ出て、又高山線で名古屋（\*屋）へ出て新幹線で帰阪。

それ以来 第二次入試と結婚式でハガキ一枚書く間もない。

帰阪した翌々日 日曜日、九度山より昨年買った九十坪（実測は道路にとられて六十坪位 三十五万円）の隣りに、空家の農家（去年より欲しかった家）附、畑つき 計百坪余り 五十万円で買はないかとの話で、早速家族揃って出かけた。

まだ四、五十年程の新しい、しつかりし大きな百姓家 三十坪位の建坪で、他に納屋と土蔵があり 畑も小さいのがついていて、まるで夢のようなうそのような話、家の前は清流で、丁度対岸に山桜が一本満開で全くの仙境（\*以下2ページ…）

早速買うことにして目下登記準備中。数十万かけて洗いをかけると新品同様になる筈、一部分だけ手入れをして使ってもよいと思っている。家族一同「長者どん」の家といって大喜び。井伏さんなど心からうらやましがる事と思う。六月一日が鮎の解禁日。

土地の世話が相谷さん（\*相谷和男。当時帝塚山学院中高等部水泳指導顧問）と今川さん（九度山町会議長）だからだまされる心配はない。

今度帰阪の際は案内したい。将来はこの丹生川ニユウガワの家から大学に通つてもよいと思つている。僕の憧れの田園生活が送れそうだ。

四月二日 ひるYMCAで教え子鶴崎（\*鶴崎裕雄氏。学院大学名誉教授。当時学院高等部教諭）の結婚式夜 教え子の結婚式、四月三日は ひる 西尾先生（\*西尾連。連はムラジと呼ぶ。当時帝塚山学院副院長）のお嬢さんと高等部米田先生（\*米田伸次氏。学院大学元教授、国際理解研究所元所長。当時学院高等部教諭）との結婚式 夜 同窓会パーティー四月一日は 前日 山本最純氏（\*当時帝塚山学院評議員）が亡くなったので、一日午前 森先生（\*森磯吉。帝塚山学院第4代理事長、学院大学初代学長…一九六六年四月―一九六七年三月）中村先生と一緒にお悔み 密葬三日 十日に社葬（\*以下3ページ）がある、その他のあいた時間は 大学と高校の仕事と会ギ、全く忙しい。「学校をやめたい やめたい」と家へ帰つてはこぼしてばかり

学校の会ギと結婚式に責め殺されそうだ。今日も今学校から帰り此手紙を書いているが、これが書き終り次第 新大阪ホテルへ 結婚式、

昨日、五時から家族一同タクシーにのり 豊中の源 高根のアパートへいった。すごい本のシユウシユウ整理家なので晴子（\*英二の長女小林晴子氏）と光（\*コウと呼ぶ、英二の長男庄野光氏）に見学をさせた。団地の二部屋に寸分すきなく本がぎっしり そしてきっちり整理されているのに感心。

一同桜を見ながら タクシーで梅田へ。ミュンヘンで フランクフルトソーセージ、ニワトリのからあげ、仔牛の銀串やきをたべる。帰途は 晴子はオーヘンリー、光はカミュ異邦人を源からもらい、僕は（\*以下4ページ）遠藤の沈黙を買った。レコード屋により、モーツァルトをジャズにしたコーラスレコードを買う（この頃、古典音楽をジャズにするのがヨーロッパではやつている）

光ちゃんは 一夜で異邦人を読む。光ちゃん 旧訳聖書を創世記より読み始めている。我家で一番の読書家。

豪（\*ゴウと呼ぶ、英二の次男）は遊びほうけている、悦子晴子と仁川の浮田へよばれた時 豪だけは一人宝塚へいきのりものにのり 夕方仁川により悦子晴子と合流、豪だけ メシも食はずに梅田へ出て 晴子と「クラの風車」を見物、食事も忘れて遊ぶのが好き。

春休も愈々終る、僕は益々多忙、一回代つてみてくれんか、ではこれから新大阪ホテルへ  
皆さんよろしく

四月五日

◆00220179-09 庄野英二↓庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和四二＝一九六七年一月五日）

【原文】：

帝塚山一同めでたく新春を迎えた。

例により近況を、

十二月初旬（既に書いたかもしれないが）民芸星の牧場郡山公演に招かれ、その序に、宮沢賢治研究の目的で、花巻、盛岡を旅した。（民芸の招待と大学の研究出張による）

十二月二日、私大学長会議に九段教育会館に出張、前夜NHKテレビ（ひよつとすると十日より週一回子供向を書く）小山氏（\*小山賢市氏。当時NHK神戸支局長）と打合せ、新橋のカニとチャンコ鍋の店（二回目）新橋第一ホテル泊（もちろん酔っぱらう）

十二月二三日、吉川哲雄さん（\*一八九九—一九六七。日本の青少年スカウト教育に多大な功績を残した方で、愛称「哲ちゃん」。「懐かしの森へ」「心の灯」の作詞家）逝去、享年68歳。去年の九月には紀伊国屋で、星の牧場を日光の人と一緒に見てくれ、十一日に堺の病院にお見舞にいった時には、とても劇をほめてくれていた。

二十四日（前日お悔み）吉川氏葬儀 ボーイスカウトの少年たちがひつぎをかつぎ、出棺の時、堵列したオールドスカウトやボーイスカウトが、吉川さんの作詞した「つとめ果し心さわやか、こよいうれし 星明りに、わ（\*以下2ページ…）が古巣へ帰らな」と高唱したのは、誠に吉川さんを送るにふさはしかった。

その夜、森先生と吉井さん（\*吉井巖。帝塚山学院大学教授、後に文学部学部長も務めた）とバー三軒二十五日 会館で欽一さん<sup>1</sup>の一周忌。

二十八日 大学生の父兄の葬儀 アベノ葬儀場、そのついでに父母兄の墓参り、その帰り、豪とスバル座の前でデート、

ドリトル先生の映画を見て帰りに、ミュンヘンにより、豪は、フランクフルトソーゼ二本、ビーフカツ一、ハンバーグステーキ三分の二（三分の一は僕）ゲルマンボール二分の一（二分の一は僕）僕は数日歯が一本ぬけて治療中でたべにくい、すしを二本買って帰る。

二十九日 豪の腹工合悪し。

三十日 僕の入歯出来る。

三十日、九度山へ相谷氏にすっかり支払いに行く。

三十一日、スコッチ赤黒、灘の超特級銘柄各種、樽入り酒等そろえて越年 この日実業の日本より新刊、童話名作集の印税二万五千円入り、やつと愁眉をひらく。理論社、数十万円の印税を少しも送ってこないの困った。毎年六月と十二月には必ず少しでも（五万円以上）送ってきたのに今年はこない。（\*以下3ページ…）

一月一日 雑煮とトソを祝い、里子さん（\*貞一の長男鷗一の嫁。学院の事務員として勤めていた）宅へ

富さん（\*英二の妹滋子の夫・川端富之助。当時の農林省職員で旧満州に行っていた、敗戦後引き上げに苦労したそうだ）も帰ってきた。克、章（\*滋子のふたりの息子、克彦と章彦のこと、このふたりは後に克夫、章夫

に改名)は社会人となったため子供たちに年玉をくれた。

至ハン(\*貞一の末息子庄野至氏、英二の一番下の弟)会社ストで出務。

二日 朝至ハン宅へ富さん夫婦と里子さん我々呼ばれる。至ハンとこ、二階一階小部屋建増して快適になった。カラテレビもかい豪勢なり。

午后 教え子その他結婚せし者など夫婦数組来り 酔っぱらう

三日 誰もこずで静か、サハラ味噌漬けをやって静かに酒を飲む。

四日朝 サツカンラグビー<sup>②</sup>に出かける前に立寄る。

僕は今年海の童話を書きたいので、加太の淡島神社に詣ることにした。正午家を出て、高島屋でウンコをした後、バックスキン革のハンティング三千五百円を買い、南海にのる。優待券で電車賃不要、スチーム暖く、うつらうつら、尾崎で潤ちゃんの「山高帽」<sup>③</sup>(\*以下4ページ) 思いだし乍ら樽井(\*当時、樽井に帝塚山学院の臨海学舎があった)を見忘れぼんやり通過(帰りには見た)

和カ山市駅でサツカンの弟にあう。彼の嫁さんの里が加太線の八幡にあり出かける途中、

加太にて下車、海のはなにある淡島神社に詣る。門前にサザエの茶屋数軒、サザエを焼く匂いをかいで、承服出来る僕ではないので、入歯でかみにくいのも承知で、床几に腰をおろし、焼きたてのサザエで熱カンを一ぱい。

ウニとサザエの籠を買い、海を眺めて、スチブンスン(\*イギリスのスコットランド、エディンバラ生まれの小説家、詩人、エッセイストのロバート・ルイス・スチブンスン)、コンラッド以上の海洋小説が書けるように祈った。ピカピカの百円をサイセン箱にも投じ、紀文の帆柱も眺めてきた。

その間、悦子、晴子、豪は京都へデユフィー展。

以上が年末年始の近況 ところで「丘の明り」おめでとう、造本が立派でよい、僕も晴子も全部読んだ。里子

さんも、山高帽、石垣、苺があるので、うれしいと云っている、（\*以下5ページ…）お礼の要求をするわけではないが、「丘の明り」既に二十冊以上買って配った。

阪急デパート品切れになり、又とりよせてもらった。おせいほにしたり、家にきた人で余儀ない人（仲人した人など）などへの贈物にしたり、昨日はサツカンにあげたりという具合。

つきあいひろいと、物のもらいっぱなしにはなれないので、こちらでも何か買はねばならず、その点本が一番よい。

村上さんから潤ちゃんから聞いたと云ってお礼を云ってくれたが、村上さんの「マロニエ<sup>(4)</sup>」も大丸にはなくなってしまった。

以上のようにみんなめでたい正月、育ちゃん（\*隼一の娘）は学院事ムの人たちとスキーにいつている。

豪、昨日、京都で天ぶら定食食べて今日は腹の調子よくないらしい。

学校が始まると入試が忙しいので、後一週間徹底してダミンを貪ることにする。

一月五日記

酔英閑人

◆00220179-26 庄野英一↓庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和四四〓一九六九年一月一四日）

【原文】：

僕は戦争中、支那や東南アジア（何れも華僑の町）で過したので、台湾の支那街を見、久しぶりに福建語を聞くと、青春の思ひがよみがえってきた。

支那料理も五日間 朝昼晩、十人一卓位でコースを充分に食べた他、露天屋台店で夜食も食った。バナナポンカン パイヤも、



ドーデーのアルジェリア旅をまねた旅行であったが、台北は矢張り冬で、南国の日射しがなく 雨ばかりであったのは惜しかった。

潤ちゃんもみこしをあげて いったてはどうか、大阪へくるよりは楽にいける。

台湾は治安がよくて、不良グレん隊 チンピラなどいない（戦時下のため） それに中年以上の人がとても日本をなつかしがるし、言葉が通じるのもよい。

ホテルも立派なものがたくさんある。

何れ会った時にゆつくり話す。 再見。

夏ちゃん きれいなカレンダーありがとう。あのカレンダーを見て旅を夢見ている。（\*以下2ページ…）

「ごちそう島」の批評ありがとう。

人生読本（\*NHKラジオトーク番組）聞いた。鱒の味噌漬天下にけんでん（\*喧伝）して頂いて悦子は感激してゐる。

矢神さん（\*帝塚山学院中高の体操の教諭）が、ラジオからあなた（英二）とそっくりの声が聞こえてくるので終い迄聞いたら潤三さんやたと云ってました。

扱て、正月帝塚山一同無事めでたく迎えました。小生、二日より台湾旅行。

二日朝十時伊丹発 十二時台北着、竜山寺、孔子廟、博物館、総統府等見学、夜は夜景を見た後、ジャカルタの夜を思いだすような露天市場の屋台店をたべ歩く。

三日 汽車で台中へ行き、バスで日月潭へ きれいなホテルに泊る。

四日 午前 湖上周遊 ツオウ族の部落へ、（春夫夫人が たびびと という小説で日月潭を書いているのと、童話イナゴの大旅行が台湾の車中風景なので、これを見るのが主目的であった。） 午後 台中見物 台北へ。

五日六日 台北ブラブラして六日五時台北発大阪着七時。  
たった二時間で外国へいけるのは うそのようであった。

★庄野英二所蔵 庄野潤三↓庄野英二への書簡（葉書 郵便の消印は昭和五十一年〃一九七六年十一月六日）

【原文】

ただ今、味噌漬（多分、サハラの）到着しました。有難うございます。早速、今夜、みんなで頂きます。おいしいので、楽しみ。悦子さんにお礼申し上げます。

○長沖さん追悼号の原稿、一昨日、杉山平一氏宛に送りました、六枚、速達で。

○西本先生<sup>⑤</sup>の喜壽を祝う会の案内あり（知らない間に発起人に名前が入つてゐました）、これは欠席の返事を出しました。「放送教育」の随筆のお礼と感想のハガキは奈良宛に出しました。もし英ちゃんが出席されるのであれば、どうかよろしくお伝へ下さい。

○「新潮」三百七十八枚を渡して、九日に社へ行つてもう一度手入れ、更に校正刷に目を通します。「文学界」新年号、引き続き書くことになり、頭の中からつぼ、出来れば隔月にでもほしい（二冊にするために）といふのにサッパリ、これから考へます。そんな状態ですので、西本さんの会は何卒悪しからずお許し下さい。

○寒くなりましたが、皆様お大事に。

「新潮」は二月号に発表です。庭でうぐひすの笹鳴き、ジョウビタキうつくし。

庄野潤三（\*住所印）

## II 作家同士の交流

◆00220179-21 庄野英一→庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和四四〇一九六九年八月十日）

### 【原文】

「紺野機業場」おめでとう。よくもまあ、ねっちり、こっちり書きも書いたものだと思感してゐる。

長年かかったのも無理はないが、一人の人間と、家族と血縁と、地域の生きた歴史に血がつながっていて、これこそロマンというか、大河小説というか感心した。挿話がすべて面白く、人生の不思議さとか哀感とかがあつて、よくもこんなに、一粒一粒の挿話がみんな面白いのがあつたものだと思つくりしている。たとえてみるなれば、この作品は、大きな大きなマスカットの房をたくさん集めて入れた木箱のようなもので、一つ一つの房も見事なれば、一つ一つの果実が（\*葡萄の一つ房の絵に矢印で一つと小さな文字で書いてある）、果肉がはちきれそうで、おつゆがたつぷりで、芳香をはなっているようなものだと思う。

忍耐と努力と腕前に改めて敬意を表する。

但し、まだ八十二ページ迄しか読んでいない、こんな話は、急いで読みとばさないで、老人の話を聞くように、時間をかけて読むことにする。これを読む批評家たちも、きつとたんのうすることだろう。（\*以下2ページ…）気がついたミスの一つあげると、シペリア出兵の時「勤務上等兵」であつたというのは「伍長勤務上卜兵」のことである。陸軍では、通称「伍勤」ゴキンと呼んでいた。兵隊が一年たつと、その中で最優秀の上等兵が中隊で二名位、「伍勤」になる。上等兵は兵隊だが、伍長以上が下士官になる。「伍勤」は兵隊でありながら、職務の際は下士官の勤務につくことができる。

僕も入営した当初、同じ上卜兵でありながら、二年兵にいはりちらかし（同年兵で）威厳があるのに驚いたが、

それが伍勤で、上着のひじにこんな小さな記章（ひじ章という）がついていた。（\*うでに赤と金地のひじ章の手描きの挿絵）

中隊に於ける一番はりきりである。

その後、兵長という階級が出来てから、「伍勤」は無くなったものと思う。兵長以上に昔は貫禄があった。

数日前、光ひよこつと帰省。山のクラブに入って、たくましく野性的な生活をしているらしい、友だちが下宿に集り、シヨウチュウをよく飲む由、先日は大雪山系を一週間踏破、八月中旬から、日高山系の自然探査に出かける。明後日又帯広へ帰る。

★庄野英二所蔵 庄野潤三↓庄野英二への書簡（葉書 郵便の消印は昭和三五年〳一九七〇年五月二〇日）

【原文】

「ロッテルダムの灯」<sup>(6)</sup> 全部拝読しました。いい本を作られたことをお喜び申し上げます。こんな本はおそらくこれまでに無かつた思ひます。立派な記念碑です。英ちゃんの持つてゐるいいものが、非常にうまく出てゐて、この「ロッテルダムの灯」一冊で、庄野英二といふ人間がどんな精神で生きた人かといふことがハッキリ分る——さういふ本です。「ロッテルダムの灯」を巻頭においたのは象徴的です。「菊」に感心しました。いい話です。「ダンクウエル」は傑作です。人生を感じさせる挿話です。「美校出の兵隊」、「カーネーション」、「はり絵」、「愉快な騎手」、「カンカン虫」、「阿波丸の乗客」みないい話です。「ジャーデン美術学校」、「クリスマス・キャロル」も普遍性のある話です。「長い航海」、「短い手紙」も英ちゃん独自のものです。ムダなのは一篇もありませんでした。千壽子（\*潤三の妻）が一番に「母のこと」をよんで泣き出しました。一冊で（\*も）多く売れることを祈ります。

◆00220181-02 庄野英一→庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は、昭和四七＝一九七二年十二月十二日）

【原文】

「アレン中佐」についてのハガキ二通深謝。心配していたが潤ちゃんに及第点をもらい先ず安心した。小宮山さんからも「涙に溺れて読了した」という手紙をもらった。とにかく全力投球で書いたので、今しみじみ浄福を味っている。

取次店、小売店の十二月以後 不売運動で小売店にうまく流れないので、クリスマスを抑えずこし心残りである。然し何れは解決することだろう。

年末をひかえ、おいしい贈物の品（新潟のスズ子の粕漬、北海道から空輸のホッキずし e t c）で毎晩酒を楽しんでる。今日から冬休み、この休みは旅行はしないで、紀行文と雑筆を軽く書く程度にする。

ベッタラ漬け（＊大根の麴漬け）、広島菜、酒の粕、みかん、ぼんかん等 近所であればオスソ分けしたいのだが、できなくて残念。庭に食糧を積んで、天然冷蔵庫と称している。

先日長沖さんや若い大学の仲間五人を招き、台所で二羽のニワトリの丸焼、スフレその他の手料理で、ジョニ黒一本、ヘネシー五星一本、広島加賀鶴を飲み 心地よく酔った。

昨年引続き、学費の値上げをしたが、学生から蚊の鳴く声も聞えず世はこともなし、安泰の年の暮れである。年が明けると入試で忙しいが、入学志願者も増える一方で大学ももうゆるぐことなし。

晴子 縁談チョイチョイあり、節分迄には決めたいと家族中急いでいる。

皆さんお大事に よいお年を

十二月二十二日

英一 拝

庄野潤三様

① 横田さん入院中の由、はがき頂いた（アレン中佐のお礼状）おあいの節にはよろしく

② 小沼さん 早大革マル事件で、大変な事だろうと心配している。

横田さんはゆっくり入院している方がいい。学校へはでないようにすすめてほしい。

★大学図書館所蔵 庄野潤三↓庄野英二への書簡（封書 郵便の消印は平成二年〓一九九〇年三月十二日）

【原文】

『鶏冠詩人伝』、拝読しました。昨夕、読み終へました。読みごたへがありました。藤沢さん（\*大阪文学の大御所の藤澤桓夫）との別れで幕切れとなるのが、余韻があつて、よかつた。

かうしているんな記録を集成してみると、英ちゃんの半生は材料豊富、ヴォリュームたつぷりであつたといふ気がします。悔いは残らないでせう。

読んでゐて気になつた誤りをお知らせしておきます。（どこだつたか、忘れても探しても見つからないのもあります）

P 22 ダグラス・フェア・バンクス↓ダグラス・フェアバンクス Fairbanks（\*以下2ページ：）

P 39 京大の石田憲三教授↓石田憲次教授

京大にゐた有名な英文学者といへば、この人です。同姓の人がゐたとは思はれません。

石田憲次は研究社の「英米文学辞典」に名前が出てゐますから、ごらん下さい。

「じゃがたらうた」の中であつたと思ふのですが、戦ひに敗れて、といふのが、破れて、となつてゐた個所がありました。さがしたが、見つかりません。これは、「敗れて」の方がいいでせう。

P 252 会が初まつた↓始まつた

P 227 高橋清祐快心の舞台↓会心の舞台（\*以下3ページ…）

P 287 全国順業の旅↓巡業の旅

P 292 学校が初まる↓始まる

P 295 起拳が不自由↓起居が

気のついたところだけ書きました。重版のときに訂正してください。

お母さんが息を引き取ったあと、庭のライラックの白の花を取つて来て、枕もとに供へるところがよかつた。

兄ちゃん（\*庄野貞一の長男隼一）の名を刻んだトロフィーのことを書いたところ——知らなかつたので、うれしかつた。（\*以下4ページ…）

ところどころ、小生のことを入れて下さり、感謝します。

「ロッテルダムの灯」の刊行、受賞のくだりが、なつかしく、うれしかつた。

「星の牧場」ニュージージラントのロケーションの話を読んで、帰国するなり、小生発病入院の知らせに驚くところ、こちらでも驚きました。御心配をかけました。

本の表紙、カバールの薔薇の絵、よかつた。この装釘、成功しました。

創元社は校閲をしつかりしないといけない。東秀三、何をしてゐるのかといひたいでは、おたっさで。

三月十二日

潤三

英二様

### Ⅲ 趣味、関心

◆00220199-03 庄野英一→庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和五五〇一九八〇年七月十一日）

#### 【原文】

よいことづくめの結構なハガキ拝受。

先日悦子が墓詣りにいった時、草をきれいにぬいてあったので誰が抜いたのかふしんに思っていたところであった。その前、小生と悦子で墓にいった時、大きい草はぬいて小さいのは残しておいた。悦子は毎月欠かさず墓に行く、そして盛んにわしに同行せよと要求する。帰りのしあげにすしかうなぎを食べにいこうということなんである。

ロンドンから帰った頃、すぐに便りをしようと思っていたが、忙しくて手紙どころでなかった。学校は週休四日制でひまなのだが四月以来の僕のムチャイキなスケジュールのためである。

火曜日、大学で放課後美術部の学生とクロツキ

水曜日、大学の帰り、朝日カルチャーへ行き裸婦のデッサン

土曜、午前、朝日で石膏デッサン

午後、裸婦デッサンとクロツキ

◎毎日、トルソー婦人像を家でデッサン（\*以下2ページ）サン、朝、出勤前に一時間 木炭紙に形を描き、夜一定の方向の照明で陰をつける。トルソーデッサン二十八枚描いて、大方覚えてしまったので、今度はミロのヴェイナスの頭部だけの石膏を買った。まだ一枚目を描いている途中だが、むつかしく手を焼いている。

吉行（\*吉行淳之助）のことを利用すると



モモ尻三年 顔八年

トルソーで婦人のモモや尻を每晚々々木炭紙にていねいにさする（木炭をつけて）ので ついに悦子がいやらしいと云うようになった。正面の三角地帯もゆるやかな起伏があるので、小指で微妙な陰をつけなければならぬ。

ヴィーナスの顔もそのうちになれることと思う。右手で描いているのに、左腕が五十肩のように重く上らなくなった。ある画家に聞くと、右手で熱心にやると左腕が五十肩のようになるということだ。（\*以下3ページ…）

その他油絵八号を三枚とクレパスの絵六号十枚余り描いている（展覧会に出品出来る程度の作品）

寝る前に講談社発行の「世界の素描」のうち、ルーベンス、マチス、モディリアーニ、アングル、ドガ、ゴッホ、セザンヌ、ルノアール、ピカソ、レンブラント、ロートレック。（うすい本）を一通り眺めてから寝る。この半年間の進境いちじるしいものがある。後半が楽しみだ。

もつと若い時からやっておればよかったと思うし、今迄に好きなどうり（\*とおり）に描いてきたのもよいことだとも思う。デッサンはある程度上手になりたいが、デッサンが上手で絵がへたでもいけない。一番大事なことは美に対する感動 感受性だと思ふ。デッサン上手で美の感受性のない者、色彩の音痴にはよい絵が描けないし、個性も獨創性も大事だ。しかしやはりデッサンでは美に対する感受性も描く技術、（\*以下4ページ…）観察も養成されることは確かである。

今日、短大で前期最後の授業をして帰ってきた。今日から九ヶ月のバカンス、たんまりポーナスもらつて何のふくれることがある。七月十五日 八月十日、また月給も入る。坊主丸もうけ以上。

デッサンと裸婦にしばらく専念し、二十六日から小屋にこもる。

木曾の小屋には油絵その他の材料どっさり送つてある。

ゴッホは弟に絵具や筆や生活費を送つてもらつたが、僕はゴッホほど描けないので弟に援助は乞はない（ずう

ずうしい)

以上のような具合で半狂乱状態でご無沙汰してすまなかつた。

皆さまによりしく

七月十日

老画学生

庄野潤三様

★大学図書館所蔵 庄野潤三↓庄野英二への書簡(封書 郵便の消印は昭和五六年〓一九八一年六月六日)

【原文】

前略

作家代表団に加はつて中国訪問の旅に出発する日が間近で(協会ニュースで知りました)、これまでの中国旅行と違つて多少、気疲れのすることもあるかと思ひますが、団長の山本健吉さんも詩文に理解のある人ですし、楽しい旅になるやうに願つてゐます。

腹八分目で(好物の中国料理ですから)、気を付けて行つて来て下さい。

六月二日に、芦屋の鈴木さん夫妻と神戸の佐伯(外語英語部同級生)と連れ立つて(三宮に集合)川崎造船所の川崎正蔵(初代)が菩提寺として開いた徳光院、布引の瀧、再度山の修法ヶ原の外人墓地、ポートピアとまはつて来ました。(※以下2ページ…)

殊に、修法ヶ原の外人墓地は、佐伯が市役所で交渉して特別に許可をもらつての見学で、「早春」(※一九八二年刊行された潤三氏の小説)に登場するスコットランド生れで、神戸居留地の中心メンバーとして、スポーツ、レクリエーション、消防、社会奉仕に大活躍をして、六十歳で死んだアレキサンダー・キャメロン・シム(※

Sim, Alexander Cameron 一八四〇—一九〇〇イギリス人)の墓前に花を持つてお参りすることができたのは、大きな収穫でした。

山の中の、うぐひすの声だけしか聞えない、清浄な、申し分のない環境で、こんなところに眠る人たちは本当に安らかさを保証されてゐるだらうと思ひました。偶然、シムの墓碑の近くに関西学院の創立者ランバス博士の父君の墓を見つけ、やはり「早春」の中で少しだけですが触れる父子ですので、喜び、冥福を祈りました。(ランバス博士の墓は、上海のお母さんのお墓と一しよださうです)(\*以下3ページ…)

「早春」の仕事を通じて神戸を愛し、神戸と運命をともにした外国人—特にイギリス人が多いやうですが—の生涯を知り、共感を覚えました。あと二回で終りにしますが、「水の都」から自然に「早春」へとつながり、阪神を舞台にして楽しい、思ひ出になる小説が書けたことを仕合せに思つてゐます。

あとは三月ほど置いて「文学界」にチャールズ・ラムのこと—といっても、福原さんの「ラム伝」があるので、評伝など書くつもりはなく、ラムを中心にエッセイの楽しみといったものを気儘に書き、そこへ去年の五月のロンドン訪問を入れようといふつもりです。丸善を通じてラム作品集の古い、立派なのを二種入手しました。その中からラムの手紙を少し(沢山あるので、とても読み切れるもの)(\*以下4ページ…)ではないので)拾ひ読みしようと考へてゐます。

以上、自分のことばかりになりましたが、その後、そちらはお変りなく、みなさん、お元気で過ごしのことと存じます。こちらもお陰で息災(\*「無病息災」からの略、元氣の意味)にしてゐます。

では、今日はこれにて。ボン・ボワイヤー・ジュー

六月六日

庄野潤三

英二様

◆00220199-05 庄野英一→庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和五五〇一九八〇年十一月九日）

【原文】

近況

十一月四、五 快晴、日本文学科学生、教師百名二台バスで犬山城、モンキーセンター見物 木曾川畔の大きなホテル宿泊、翌日、明治村見学、二日間で色紙十枚に伊吹岳、比良、明治の洋風建築 異人館、天主堂十枚スケッチ現場でクレヨン、コンテ、水彩で着彩。

（これはA.C.Cで賞められた。）

八日（土）A.C.C（朝日カルチャ）午前 独立美術会員の森崎章教室、フランメンコダンサーのクロッキー、木炭で八枚描き、何もうまくて賞められた。

午後 行動美術の会員で大阪芸大助教辻司教室クロッキー、裸婦、終業近く六十代の男が部屋へ入ってきた。こんなことはかつてない、辻司先生の先輩らしく、その男は研究生のスケッチを見て廻っていて僕のそばへきて動かず、クロッキー終るや、「あなたはモデルにいて、非常にいい画だ、絵はモデルから美しいものをつか（\*以下2ページ…）みだし、その精神、美、を表現するものである、すばらしい」といって僕のスケッチブックの全部のページをくって感心していた。後で辻さんに聞くと、朝日新聞の美術担当の有名な批評家だということであった。僕はその男とは初対面、その批評家も僕のことを全然知らずに発言したらしい。

人間 六十四才（後十日間）になっても賞められるのはうれしいことじゃ。

先日来、おどりこ（白いギャザーのいっぱいついたバレリーナ）とバンコックのメナム河に面したホテルのプールのあるテラスとランの花を油絵十号に描いている。数日中に完成する。この絵は十一月二十日に一水会の中畑草人画伯に感想を聞くつもりでいる。

いつか機会があれば、生田の部屋を飾る画を届けたいと思っている。しかし、大きな絵は額に入れると大きすぎて部屋につりあはないので、将来三号か四号くらいのも（\*以下3ページ…）を描いてからのことにする。

十三日今西祐行君<sup>⑩</sup>の小学館児童文学賞祝賀に上京、翌日信州をまはり、天気さへよければ、車窓から赤城山、浅間、赤いリング畑ごしの日本アルプス、木曾駒等を描いてくる（色紙）楽しみだ。

今、この手紙を書く前にタマゴのデッサンをした。今日は 日曜午前原稿 午後油絵。

森崎章氏（独立）は油でも水彩でも、デッサンでも僕の山の画は独特ですばらしいという。色紙に百名山を描いてみたいと思っている。先日大和文華館開館二十周年記念で鎌倉時代から現代に至る迄の富士ばかりの特集を見たが、僕はやっぱり鉄斎が一番好きだった。大観のも悪くないが鉄斎が好みにあう、現代画家で林武と梅原が出ていたが、あの程度ならこちどらもまげやせぬ。（このこと世間に他言無用）

十月九日

お山の大将より

生田長者玉机下

◆00220200-11 庄野英一→庄野潤三への書簡（封書 郵便の消印は昭和五六〇一九八一年四月七日）

【原文】

お手紙ありがとう。生田も餅坂も足柄山も皆さん元気で、日々好日の御趣テンハオです。あまりに長くご無沙汰失礼、それというのも一月二月三月学年末忙しいようで、実は授業がないので入試以外は閑で画を描くのに多忙を極めました。

二月十七日―二十日 大谷晃一君（元朝日、現在学院大学）が「文芸」に「評伝武麟」を連載中なので、ぜひ現地取材をせよと、そそのかしジャカルタへいってきました。僕とタケリンの思い出の地をシラミつぶしに歩き

廻り、インドネシアとしゃべりまくり懐かしかったです。大谷君は三十余年もたっているのに、僕のマレイ語のうまいの舌を巻いていた。これはほんとうのこと。

三月二十三―二十九日「国際理解研究所」主催の視察団団長として学院の大学、高校、中学の教員及び大学生計二十三名でシンガポール、バンコク旅行。連日連夜中華料理や海鮮料理を食べてきました。バンコックではある半（\*以下2ページ）日 タイの素人少女をアルバイトで雇い、一行が山田長政のアユタヤへいつている留守に（僕はアユタヤを知っているので）ホテルのロビーでクロツキーをした。ヨーロッパ人たちがスケッチブックを覗いて喜んでいた。

家で毎日油絵を描き、A.C.Cにデッサンにも通い 腕がしびれるほどです。週に二回以上 家に 浮田（\*英二の妻悦子の従姉の娘、澤田リサさん）や卒業生の娘さんにモデルにきてもらい晴子も一緒に描いている。悦子のしんせきの娘（この春から女子大生）には テニスウェアを着させて太いフトモモとバストをうんとデフォルメして描いてます。この子はすごいグラマで画心をそそりよる。

先日バンコックで教え子から贈られた豪華なランの花束（いろいろな種類がどっさりボール紙の箱入りで）や四月一日学長再就任が各紙に報道されたので、バラや花束がどっさり到来し家の中は花屋同然、これもみな油絵にしなければならず、若い女と花と描くのにホンロウされて（\*以下3ページ）います。超ミニのゴルフウェアを着た若い女の三点執筆中、孫の姿も描きたいがそこ迄手が廻らない。晴子曰く、「由佳理（孫 幼稚園 三年生デブ体重二五キロ）を今のうちに描いてくれないと、年頃になってもモデルに貸してやらないぞ」

こんな次第で忙しいことです。晩酌は罐ビール一本と日本酒とつくり一本。

四月から学長だが、牧野（\*牧野博彦一九八〇―一九八九年学院大学副学長）を副学長にし吉井教授（僕を支援してくれている）を文学部長にして僕自身は楽にするプランをたてている。授業は四人か五人の学生にゼミと

いっても戦後小説を週一回読むだけ、他に中国人留学生（\*筆者のこと）二十五才の娘さん 美人らしい 一昨日東京着まだあつていない、この子の父親にはあつている、現在アメリカにいるが慶応出身で中国のエリート。その娘さんに児童文学を一对一で教える、日本語は上手らしく、手紙の字は僕よりはるかにうまい、僕の本を上海で出版することになっている。（\*以下4ページ…）

その二回きりの授業の他は学長室でユデタマゴのデッサンをしようかと思つている。入学式は十一日で、開講は十八日頃。

現在 東京にマチス展がきているが、五月には京都へくるので楽しみ、僕はやっぱりマチスが一番好きでピカンには叶わんという気持（マチスぐらい描けるわけではないが）

いつも手紙に画のことばかり書いて申訳なし。

週二回ぐらいは晴子が子連れできてひるめしを食い荒すので忙しい、下の子男の子がユーモアでやんちゃでガサ、目がはなせない、ガンを持ってきて、パンパンとやられるから、爺もうたれて倒れるかくこうをせにやならず、西部劇のようにごちからも応戦し、時には悦子が「孫とほんとうにケンカをするバカがありますか」というぐらい孫と論争もする。

キ・ヨ・トウな爺ぶりです。<sup>(1)</sup>

三月六日夜<sup>(2)</sup>

英爺

皆様

追伸 由佳理曰く「なんでおじいちゃん ハダカの女の人ばかり描くの」

## おわりに

上記十二通の書簡から、次のようなユーモアたっぷりの「雅号」に接して、英二先生のプライベートでの素顔を窺うことができる。

- 「酔英閑人」…酔っぱらいの英二は俗用を離れてのんびりしている意か。
- 「老画学生」…年老いてから絵を習う画学生。
- 「お山の大将」…子どもの遊びから、一般的には仲間内で偉ぶる性格の人を指す。ここでは作家本人の謙遜と取るか、自負ととるか。

西條八十に「お山の大将」(『赤い鳥』、大正九年六月)がある。「お山の大将 俺ひとり あとから来るもの つき落とせ (中略) お山の大将 月ひとつ あとから来るもの 夜ばかり」(『日本童謡集』岩波文庫)。梅花女子大学名誉教授谷悦子氏は、この八十の詩について、「主題は、その後を訪れる夜の闇への不安・孤独という作者(大人)の心情に中心がある。そこには、『童謡を書く態度』(『童話』、大正十一年一〇月)で『児童に歌ふべきよきものの與へると共に、自身の鬱悶をこころよく吐く』くことを主張する八十の創作意識が窺える」(谷悦子「阪田寛夫が描く子どもの心と言葉——日本の童謡史を変える革新性——」。末尾参考文献の項参照)という。その分析は、庄野英二にも通じるものがある。

• 「英爺」…「英二」のもじり、「二」と「爺」という同音文字で戯れ、読む弟の潤三氏を楽しませる。当時、お正月に庄野英二邸に招かれた筆者は、先生が家で五歳の孫娘に懐かれて「じいじい(爺爺)」と呼ばれて、白い歯を見せながら満面の笑顔、すっかり優しいおじいちゃんになった庄野英二先生の顔



が今でも目に浮かぶ。

今回公開した庄野英二の書簡は、使われた用紙が手紙用の便箋ではなく、すべて原稿用紙である。おそらく氏が創作にあたる静かな時間帯に、作家の弟潤三氏に気楽にこれらの手紙が書かれたであろう。私の学生時代、庄野英二先生が授業のなかで、「僕は、深夜に気を使わない人に日記のように手紙を書いている」と話されたことを鮮明に覚えている。その手紙の「謎」の相手は、潤三氏だったと、今回の庄野潤三文庫にある書簡を整理してやっと解った。

庄野英二と庄野潤三の書簡には、作家兄弟の親愛なる兄弟愛が溢れている。今回の公開した書簡のほかにも、互いへの礼状が数多く残されている。何か物を頂いたら必ず丁寧な礼状を送る。時折、夫人も子も重ねて礼状で感謝の気持ちを表す。親しい間柄にもしっかりと礼儀を保っている。その「礼節の美しさ」が、兄弟の品格の現れである。

そして、書簡から作家同士として信頼し合っていることも窺える。互いの新刊本や受賞などのお目出度いことに對して、心込めて褒め称える。まるで自分のことのように、その作品の売れ行きに気を配り、時には買い溜めで、知人や友人に配るまでです。

もちろん、褒めるだけが兄弟愛ではない。活字になった新刊を丹念に読み、その表現や誤植について、早速書簡をもって丁寧な相手に知らせる。重版に訂正できるようにするのは勿論の事、やはり言葉に対する作家の責任感ゆえと言えよう。

専業作家の庄野潤三と違って、教育者でもある庄野英二は生前、同時に三人分の仕事をこなしたと言っても過言ではない。

一、大学副学長（1966－1974）、大学学長（1975－1979、1981－1985）、つまり大学開学時より一九八五年三月

末専任退職まで約二十年間大学教授として、また学院の理事として学院の経営者としても長年務めた。

二、全集十一巻のほか、晩年、海のシルクロードや鄭和等東洋文明を題材に多くの作品を産み出し、数多くの賞を受賞された作家・児童文学者として。

三、文学部教授の傍ら、日本においてもかなり早い段階で、国際理解教育研究所の仕事に率先して関わり、国際理解教育と戦後女子教育に尽力した。

三つの仕事をこなしながら、強靱な精神力でエネルギーで明るく生き急いだ晩年の庄野英二。多才でたいへん複雑な作家でもある。このような作家を理解するためには、仕事場だけの顔だけでなく、プライベートの素顔こそが、作家の本質・魂に触れることになる。今後もコツコツと書簡の整理を続け、資料公開に努めていきたい。

## 注

(1) 田中欽一。庄野貞一の兄の息子、英二の従兄弟。学院事務に勤め、帝塚山会館で管理人も務め、合宿する学院のクラブ学生たちの世話を夫婦でしていた。

(2) 坂口正二。庄野英二の陸軍時代の友。坂口の若い妻水泳選手だった信子は、後に結婚。そのときの仲人をつとめた、当時学院水泳部の顧問も務めていた英二先生を「ボートのおじさん」と思い込んでいたという愉快なエピソードを、英二先生の長女の小林晴子氏から伺った。

(3) 庄野潤三の短編小説「山高帽子」、昭和四十二年一月号『群像』、昭和四十二年十二月、筑摩書房版『丘の明り』に収録。

(4) 村上菊一郎（一九一〇—一九八二）。フランス文学者、翻訳者、早稲田教授、一九八一年に定年退職で名誉教授。作品に『マロニエの葉』（現文社、一九六七年）などある。

(5) 西本三十二（一九九一—一九八八）。大阪府師範卒、コロンビア大学院で教育博士号取得、奈良女高師Ⅱ現奈良女子

大教授、NHK理事、国際基督大学教授など経て、一九六七年四月から一九七五年三月まで帝塚山学院大学学長を務め、学院大学の留学制度を作った教育者。

(6) 『ロッテルダムの灯』は、庄野英二のエッセイ集。一九六〇年に自宅で飼っているレグホン鶏の名前に因んでレグホン舎刊として自費出版。翌年の六一年に日本エッセイスト・クラブ賞受賞、のちに講談社文庫、文芸文庫で刊行。

(7) 早大革マル事件とは、革マル派による一九七二年〓昭和四十七年十一月八日早稲田大の学生だった川口三郎を集団でリンチし、殺害した事件。

(8) 高橋清祐（たかはし・せいすけ）は、劇団民芸演出家。東京都出身、一九六一年に同劇団員となり、故宇野重吉の演出助手を務めた。劇団民芸上演年表（劇団民芸公式サイト）によると、庄野英二の小説『南の島』（一九七六年）、『アレン中佐のサイン』（一九七七年）、『長い航海』（一九七八年）、『星の牧場』（一九七九年）、『砂漠のアヒル』（一九八四年）、『短い手紙』（一九八六年）の舞台の演出は、すべて高橋清祐である。二〇一六年十一月十九日に八十四歳で逝去（『毎日新聞』、二〇一六年十二月十二日）。

(9) 「おたっさで」とは、お達者でという意味の庄野ファミリーでよく使われるお茶目な表現。

(10) 今西祐行（いまにし・すけゆき、一九二三年―二〇〇四年）、日本の児童文学者。坪田譲治主宰の「びわの実学校」の同人。作品『光と風と雲と樹と』は、一九八〇年に小学館で刊行、同年十一月に小学館児童出版文化賞並びに日本児童文芸家協会賞受賞。

(11) キョトウとは、徳島弁で風変わりの意。

(12) 封筒の消印と内容から見て、四月六日の間違いではないか。

#### 参考文献

- ・『帝塚山学院年譜』（学校法人 帝塚山学院、一九九六年一〇月）
- ・『帝塚山学院四十年史』（帝塚山学院四十年史編集委員会、昭和三十一年十一月一日）
- ・『帝塚山学院大学50周年記念誌』（大学50周年記念誌編纂委員会、平成二十八年十月八日）

- 『鶏冠詩人伝』（創元社、一九九〇年三月二〇日）
- 谷悦子「〈特集〉童謡が生まれるとき 阪田寛夫が描く子どもの心と言葉―日本の童謡史を変える革新性―」（姫路大学  
人文学・人権教育研究所『翰苑』Vol.5 二〇一六年十一月） p.65―86